（平成２９年６月２７日）

第２４回　赤松小三郎研究会　のご報告

日時　　：Ｈ２９．６．２０（火）　１８：３０～２０：３０
場所　　：東京・文京シビックセンター　４Ｆ　Ｂ会議室
出席者　：１８名

＜　**配布資料**　＞

資料―１　東京大学の史料編纂所維新史料綱要データに収録されている名称「赤松小三郎傳」の検証結果　原文は「藤澤直枝編」の「赤松小三郎先生」～石川浩さん作成

資料―２　明治初期の「脚気病に対する陸軍・海軍の対処の相違点とその過程における東京慈恵会医科大学の誕生」～沓掛忠さん作成

資料―３　明治初期の日本の医学を「イギリス医学とドイツ医学」のどちらを採用するかという政府の大きな問題～沓掛忠さん作成

参考資料―「高木岬と久野岬」、「リウエル（整形外科手術器械）」について
上田郷友会　上田部会報（第１４０号、Ｈ２９．６．１）

＜　**回覧資料**　＞

・　成田邦夫さんより供覧資料（第１０回赤松小三郎生誕祭の写真）
・　沓掛忠さんより（戊辰戦争関連の写真）

＜　**内　容**　＞

１．　**赤松小三郎の第１０回生誕祭の様子についての報告**～成田邦夫さん

赤松小三郎の「第 10 回 生誕祭」が５月１４日、上田城跡公園内の招魂社で行われた。その様子の報告が成田邦夫さんからあった。主催は赤松小三郎生誕祭実行委員会（土屋陽一実行委員長）と赤松小三郎顕彰会（林和男会長）。地元の国会、県会、市会の議員や市教育長ら約１５０人が参列した。

２．　**東京大学の史料編纂所データに収録されている 名称「赤松小三郎傳」の検証結果**～石川浩さん

＜結論＞東京大学史料編纂所の維新史料綱要データに収録されている**「赤松小三郎傳」**は「藤澤直枝編」の「赤松小三郎先生」と同一内容。誰かが手書きで写し、維新史料綱要データに登録したと思われる。
（維新史料編纂課の松尾茂氏の可能性があるかもしれない・・関良基さん）

＜特徴＞①藤澤直枝編「赤松小三郎先生」（大正６年・１９１７年発刊）の原文を手書きしている（⇒理由は不明）、②著者・編者は不明、③数カ所に「略中」表示あり、それぞれは「幕府への建白書」「続再夢紀事にある松平春嶽への建白書」が省略、④碑文を抜き出して別シートに手書きして「赤松友祐基碑銘」で掲載、等

＜その他＞「赤松小三郎先生」は上記の藤澤直枝編の他に、柴崎新一著（昭和１４年・１９３９年発刊）がある。

３．　明治初期の「脚気病に対する陸軍・海軍の対処の相違点とその過程における東京慈恵会医科大学の誕生」～沓掛忠さん

（１）海軍部内における脚気病への対応

・明治１５年７月の壬午の乱の際に派遣した軍艦「扶桑」内で多くの脚気病が発症したことをきっかけに、海軍医務局副長高木兼寛（たかぎかねひろ）がその原因究明に立ち上がった。

・その結果、脚気病はビタミン不足によることがわかり、高木は海軍の食費の改善を強く主張し、食事の質の改善については白米を排した「タンパク質の多い食事」を採用することで実証的（イギリス医学的）な解決を図った。このように高木の努力により、ついに海軍は脚気病を克服した。

（２）陸軍の立場

・当時の日本の医学界の体制であった「細菌学」を必要以上に重視していたドイツ系医学を旨とする立場であった。

・結果として、陸軍は最後まで細菌説にこだわり、脚気病に対して的確な手を打てなかった。

・森林太郎（後の森鴎外）は、海軍の麦を混ぜる食事に反対し続けた責任を取る形で陸軍医務局長を辞任している。

（３）ドイツ医学とイギリス医学

・ドイツ医学：基礎医学が優れており、病理学上理論的に解明することを主とした。患者を「医学の研究対象・病理の研究対象」として見る傾向が強かった。

・イギリス医学：実証主義を基本としており、臨床医学に優れている。従って、病人・けが人に必要な治療を施し、早期に社会復帰させることが最大の特徴。

（４）東京慈恵会医科大学

・１８８１年（明治１４年）、高木兼寛が医学を庶民の役立つ医学とするために設立した「成医会講義所」に始まる。伊藤博文のアドバイスにより全面的に皇室の支援を受けてスタートした。

・医師のパートナーとしての看護婦の養成を図るための「看護婦養成所」の併設も特

徴。
・同医科大学は初の単科系医科大学で、慶應義塾大学医学部、日本医科大学と並び私立医大御三家と呼ばれる。

４．　明治初期の日本の医学を「イギリス医学とドイツ医学」のどちらを採用するかという政府の大きな問題～沓掛忠さん

（１）当初イギリス医学を採用予定となった経緯
・鳥羽伏見の戦いにおいて、イギリス公使パークスが諸藩連合軍（討幕軍側）への働きかけでイギリス公使館付きの医師ウイリアム・ウイリスが献身的な努力と合理的で手際の良い治療によって多くの生命が救われたことがきっかけとなり、明治政府は「イギリス医学を日本の医学」として採用する予定となった。

（２）結果的に明治政府がドイツ医学を採用した経緯
・１８６９年（明治２年）、明治政府が「イギリス医学を日本の医学」として採用する直前、佐賀藩士・相良知安（ともやす）と福井藩士・岩佐純（あつし）の強硬な反対（＝強硬にドイツ医学採用を主張～オランダ医学書がドイツ医学書の翻訳が多いことから「ドイツ医学こそが当時の世界最高水準」という考えに基づく～）が政府内で大きな議論を呼び、その後相良と同じ佐賀藩出身の副島種臣、大隈重信等の政府要人が同調するなどして、日本の医学導入には「ドイツ医学の本格採用」が政府内で決定した。

（３）ウイリスの処遇
・明治政府がイギリス医学採用直前の段階で、大学東校（だいがくとうこう・官立の医学教育機関で後の東京大学医学部）の責任者に内定していたウイリスの立場を救ったのが西郷隆盛。彼は鹿児島に設立した医学校の運営一切を好待遇でウイリスに任せた。これが後の鹿児島大学医学部。

（４）リウエル（整形外科手術器械）について
弾丸を人体から取り出す器機リウエルは当時のものは実物が確認できません。参考資料の絵は現在のものであり、多分、当時のものもこのような形状に近いものであったと想像できます。（あくまで説明用の参考資料です）。

（５）関連事項
・南極に高木岬、久野岬という２つの岬があるが、これらは英国の南極地名委員会（ＵＫ－ＡＰＣ）が高木兼寛先生の脚気の研究と久野寧先生の「汗の研究」それぞれの研究業績を高く評価し、１９５２年に命名した。
・万延元年の遣米使節随行艦の咸臨丸では「麦」を積み込んでいたという話しがあり、欧米人は経験的に脚気の予防を知っていたと思われる。

・江戸時代、地方在住の者が江戸へ住むようになると「江戸わずらい」という病気にかかることが多かった。これは江戸に出て、白米ばかりを腹いっぱい食べたことに起因する。

（６）土屋義子さんより芦田閑（しずか）氏についてご発言あり。
関連情報をまとめると以下のようになる。

・芦田諧（かのう）氏は東大医学部出身で山極勝三郎の友人。櫻井家から芦田家へ養子となる。夫人は小三郎の姪（姉の娘）の（かね）。
閑（しづか）氏と新（はじめ）氏の父上
・芦田閑（しずか）氏は慈恵医専卒業（東京慈恵会医科大学）。兎束すゞ子さんの父上。
・新（はじめ）氏は千葉医専卒業で軍医。諧（かのう）氏は断絶した赤松家再興のため、明治２９年、二男の新（はじめ）氏を赤松家の養子とする。
・兎束すゞ子さんは、第６回赤松小三郎研究会の宮原さんの報告にもありますが、芦田閑の娘ですから、小三郎の姪（かね）の孫にあたります（夫は音楽家の兎束龍夫氏）
上田高校会員名簿では
・芦田閑（しずか）氏は上田中学第５回卒業（明治３９年３月卒業）。
・赤松新（はじめ）氏は上田中学第４回卒業（明治３８年３月卒業）となっている。

赤松小三郎研究会 事務局
小山平六（６２期）
荻原　貴（７９期）